トマス・フッド

1　殺人犯ユージン・アラムの夢

爽やかな夏の
　静かで涼しい夕暮れ時
二十四人の幸せそうな少年たちが
　学校から飛び出してきた
ある者は駆け　ある者は跳ね　5
　まるで池のマスの稚魚のよう

穢(けが)れなき少年たちは
　はしゃいで駆けてゆき
平らな草地にやってくると
　クリケットの三柱門を打ち込んだ　10
沈みゆく輝く夕日は
　リンの町を照らしていた

元気な鹿のように　少年たちは
　駆けまわり歓声をあげた
あらゆるものを喜びへと変える　15
　それは少年たちだけがなせる業
だが　助教師は皆から離れて座っていた
　なんとも陰気な男だった

帽子を脱ぎ　ボタンをはずし
　天から贈られる気持ちの良い風を受けていた　20
ある激しい思いが額に皺をきざませ
　胸騒ぎを憶えていた
そうして両手で頭を抱え込み
　両膝に置いた本を読んでいた

一頁また一頁とめくっては　25
　脇目を振ることもなかった
金色(こんじき)の夕暮れの中
　己の魂の平安のため　かの本を読んでいた
読書にふけって　身は細り
　蒼ざめ　目はどんよりとしていた　30

ようやく男は分厚い本を閉じ
　すばやくしっかりと
その黒ずんだ表紙を押さえつけ
　真鍮製の留め金をしっかりと掛けた
「ああ神よ　私の心もこんな風に　35
　留め金を掛けられたなら」

それからすっくと立ちあがり
　物憂げにあたりを歩いて回った
草地のあちらこちらへと
　そして木陰の一角を抜けると　40
すると思いもかけず　そこで幼い少年が
　わき目も振らず本を読んでいるのだった

「可愛い坊や　何を読んでいるんだい
　冒険話かい　おとぎ話かい
それとも英雄の話かい　45
　争い絶えぬ王や君主の話かい」
少年は見上げると　こう言った
　「『アベルの死』だよ」

突然の痛みに襲われたかのように
　助教師は大きく六歩後ずさりした　50
そうはしたものの
　ゆっくりと元の場所へと戻り
少年のそばに腰を下ろすと
　カインの話を語った

そして　今度は長々と血にまみれた人間たちの話を始めた　55
　今の世まで語り継がれる殺人の数々
人知れず殺され
　ひそかに墓に埋められた者たちの話
人気のない森で人を刺し殺した話
　洞窟での人殺しの話　60

傷つけられた人々の霊魂が
　草葉の陰から叫ぶ様を
亡霊の手が
　埋められた場所を指さす様を
神が見せる夢の中で　65
　知られざる罪深い行為が明かされる様を

カインの呪いの下
　地をさまよう殺人者たちのことを語った
彼らの目の前に真っ赤な雲が広がり
　頭には炎がめらめらと燃える　70
血が彼らの魂に染みを
　永遠に消えぬ染みを残した

「ああ　実際　私にはわかるのだ
　奴らの苦しみは果てしない
苦痛　苦痛　筆舌に尽くせぬ苦痛　75
　一体誰が命の聖(きよ)い流れを涸らしたのか
なぜなのだ　昨日　私は　夢の中で
　殺人の罪を犯したのだ

私に悪事をなしたわけでもない
　か弱い老人だった　80
男を人気のない荒野に連れ出した
　月が冷たく冴え冴えと輝いていた
私は言った　『今ここで　あなたは死ぬのだ
　あなたの金を手に入れる』

ごつごつとした棒を二度振り下ろし　85
　重い石で一撃
それから素早くナイフで一刺し
　それですべて事足りた
足元にあるのは
　ただ命のない骸(むくろ)だけ　90

命のない骸(むくろ)にすぎぬもの
　私に歯向かう力もないもの
それだけに私は老人が怖かった
　身じろぎもせず倒れているから
老人の顔には尊さが浮かんでいた　95
　殺されてなおも残る人間の尊厳

そして見よ　遍(あまね)き渡る天空が
　青白い炎を燃やしている
無数の恐ろしい目が
　非難の眼差しを投げている　100
私は死んだ老人の手を取り

　名前を呼んだ

ああ　神よ　骸(むくろ)に残る
　尊厳を目にして私は震えた
しかし私が命のない骸(むくろ)に触れた時
　血がどっと迸(ほとばし)った
凝固した血の一滴一滴が　燃える塊となって
　私の頭を焦がしていた

私の頭はまるで激しく燃える炭のよう
　心は溶けぬ氷のようだというのに
私のみじめなみじめな魂は
　悪魔の手中にあるのだ
幾度となく私は呻いた
　二度骸(むくろ)は呻いた

今や眉をひそめた空から
　天の遥か高みから声が聞こえた
血の復讐を求める霊魂の
　恐ろしい声
「罪深い男よ　お前が殺したのだから
　その体を私の眼前から隠せ」

私は恐ろしい骸(むくろ)を持ち上げて
　川に放り込んだ
澱(よど)んだ流れはインクのようにどす黒く
　川底は限りなく深かった
可愛い坊や　忘れないでくれ
　これは夢にすぎないのだよ

骸(むくろ)はドボンと音を立て
　ついには澱(よど)みの中へ消えていった
すぐに私は血みどろの手をこすり
　火照る額を水で冷やした
その晩は学校で
　幼い少年たちの中に戻った

ああ　天よ　少年たちの穢(けが)れのない魂と
　私の穢(けが)れたぞっとするような魂を思うと
少年たちの祈りの輪にも
　夕べの礼拝にも加われない

私はまるで聖なる智天使に紛れこむ
　地獄の悪魔のようだ

平安が一人一人の少年に付き添い
　その穏やかな眠りの枕を整える　140
しかし罪が私の容赦ない侍従
　私を床へと誘い
血に染まる真っ赤な指で
　真夜中の帳(とばり)を下ろすのだ

夜もすがら私は苦しみ悶える　145
　暗く深い苦悶の中
熱を持つ目を瞑(つぶ)ることもせず
　ただおびえて眠りを見つめる
罪が眠りに
　地獄へ至る扉の鍵を渡してしまった　150

夜もすがら私は苦しみ悶える
　時を告げる鐘を数えるのに疲れ果て
ある恐ろしい思いが付きまとい
　私を悩ませた
それは私を罪へと駆り立てた
　最初の激しい衝動にも似た強い欲望だった　155

ある一つの抗い難い強い思いが
　有無を言わせず他の全ての思いを屈服させた
脈打つごとに　ますます激しく
　誘惑に駆られていった　160
ついには川底に眠るあの男を
　見に行かずにはいられなくなった

空に朝日が差すやいなや
　重い体を起こした
不安に駆られ　血走った眼で　165
　あのどす黒く呪われた澱(よど)みを探した
川底で骸(むくろ)はあらわになっていた
　思いもかけず川の水は干上がっていた

陽気なヒバリは目を覚まし
　露を翼から振り落とした　170
ヒバリが飛び立つのも見えず

　その歌も聞こえなかった
あの恐ろしい行いに
　再び身を屈めていたからだ

何かを追うかのように　息も継げず
　骸(むくろ)を背負うと走り出した
人が起き出す前に
　墓を掘る暇(いとま)はなかった
人気のない森に　落ち葉を山と積み
　私は殺した男を隠した

その日は丸一日　学校で本を読んだが
　心はここにあらず
昼間の仕事を終えるやいなや
　私はひそかに森に行った
強い風が落ち葉を払い
　またも骸(むくろ)はあらわになっていた

地に突っ伏すと
　はじめて涙があふれた
私の秘密を隠すことを
　土が拒むのだ
陸も海も拒むのだ
　たとえ幾万尋(ひろ)の深みに沈めても

恐ろしい復讐の霊魂が願うのだ
　血は血によってあがなえと
そうだ　骸(むくろ)を洞窟に埋めようとも
　小石をかぶせようとも
時経て　肉が朽ち果てようとも
　白骨は白日の下にさらされるのだ

ああ神よ　あの恐ろしい夢が
　私に付きまとい眠らせない
また再び　めまいに襲われて
　私は人の命を奪うのだ
血塗られた右の手は燃えるように熱い
　まるで火に焼かれた殉教者クランマーのように

休まることのないこの土くれに
　陸も海も平安を与えることはない

恐ろしい何者かが私の魂を追い
　今も私の目の前に立っている」
少年は怖がって顔をあげ
　男の額に浮かぶ玉の汗を見た　210

その夜　穏やかな眠りが
　少年の瞼に接吻（くちづけ）をする間
冷たく垂れこめた霧の中　リンの町から
　二人の厳しい顔つきの男がやってきた
ユージン・アラムは二人に挟まれて　215
　手首に枷（かせ）をはめられ歩いて行った

（鎌田明子訳）